

美澄と言う名前の、活動的な、研部員は緒岸の隣に来るとコンピュータを鞆から取り出し、鞆を机の上に叩きつけた。中には特に何も入っているわけでもなく軽く跳ねて机の上で静止した。

「お前、行儀悪いな」

「壊れない力で投げてるから問題ないわ、進捗どう？」

「ぼちぼち」

ここで変に突っ込んで長話になるのは面倒だな、と二人の認識が一致している結果、基本的に挨拶はともさっぱりしている。

カタカタカタカタ……、2倍となったキーを叩く音。沈黙の時間が大きく減ったがこれといって雑談があるわけでもない。

「あの部分のレビューお願い:bow:」

「あのバグは昨日参考になりそうな記事見つけたよ」

二人の間でたまに発生する会話はこのような情報交換の側面しかない。

薄暗い部屋の一室で淡々と開発を続けていくチーム。開発中は互いが互いに対してあまり鑑賞されたくないのでコミュニケーションがあまりない。

「今日は黒田来ないんだっけ」

「ああ、今日は用事があるらしい」

一応黒田も、活動的な、研部員である。今の開発物も緒岸、美澄、黒田の3人で作っている。

「今日は終わりにしよう」

窓の外が橙色から黒になったところで、緒岸がそう呟いた。

気がつくとも教室の外、遠くから聞こえる他の部活の音が聞こえなくなっていた。

巡回の先生がそろそろ来る頃だろう。怒られるのが面倒だ、そう言いながら二人は早々と帰る準備を始めた。

コンピュータをカバンにしまうと電気を消し、教室を出た。教室は静寂に包まれた。鍵をいつもの消火器箱の中に突っ込んで今日の活動は終わりとなる。

廊下は右も左もわからないくらい真っ暗だ。多分コンピュータ室に人間がいることを知らず誰かが消灯してしまったのだろう。

緒岸はいつもの事だと、手慣れた様子で携帯のライトのスイッチを入れた。暗い世界の中一つの明かりが道を照らす。

二人は明かりを頼りに廊下を歩きはじめた。

「そういえば、噂って聞いたことある？」

数秒暗闇の中沈黙を保っていたが、気まずいのかそつと美澄が呟いた。

沈黙があまり好きでないのだろう、緒岸は会話を終わらせないように当たり障りのない返事をした。

「あれでしょ？人が消えるやつ。まだ帰ってきてないんだってね」

「そうそれ！」

「実際あれって先生が軟禁かなんかしてるんじゃないかって思うけど」

「そんな事はどうでもよくてっ……」

美澄は何かを言いたそうに口に手を当てて、立ち止まった。

緒岸もつられて立ち止まる。ライトの向きを前から美澄の方に向けた。